

平成二十五年十一月一日発行 第二十三巻第十一号 通巻第二六九号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成25年11月号

岡井省二創刊



霜の道

高橋将夫

かなかなの声一山を淋しうす
一滴の雫より生れ秋螢
よろづ屋にちちろ酒屋にきりぎりす
秋の蝶いのちの果てを睦みあふ

山粧ふ生きとし生けるもののため
鬼天狗河童もぬたり月の客
しどみの実舌なめらかにしどみの実
知らぬこと尽きることなし文化の日
人の道獣の道も霜の道
蟻螂の攻めも守りも斧かざす
腹割つて通草と石榴談論す

槐安集

水野恒彦

わたつみの空に日と月魂まつり
光年の中の瞬の身盆の月
省浄忌風しろがねの韻きあり
山雲の動けば動く芒原
龍淵に潜みて水の眠るなり

延広禎一

空海の通りし道や蝸牛鳴く
本復のたふさぎ干しそ衣被
産卵の海亀明けの不二仰ぐ
鰻の「う」うれしいうまいうかれ坊
たこ焼は立喰ひがよし道頓忌



加藤みき

話すたびにぱちりぱちりと秋扇
秋風に和讃声明相和して
秋の空乾びし土に金の砂
病者らの蹠美し星月夜
新走りこ糸を潰せし女かな

石脇みはる

夏の果ひと夜に風の入替はる
秋初め時空ゆがみしことありや
雨上り空むらさきに爽やかに
秋夕焼まんのお池のゆらぎかな
秋うららワイングラスのワイン色

中島陽華

阿弥陀経廁に聞こえ大暑かな
物差しに百合子の名あり秋暑し
風の輪にひよいとぼうふら踊かな
金秋の丘なり麝香猫過る
羽二重の湯文字携へ秋の空

雨村敏子

閻魔堂の小暗きところ涼しけれ
杉道を抜け谷川の盆の水
うばたまの種の一粒西の空
ビール少々梅酒少々京終に
秋茄子へ技整うる高野かな

竹内悦子

どうしても裏がへりたる蟬一尾
射干や寝かせてありし増女
八月の白ばかりなる曼陀羅華
雨傘に安堵のいろや処暑の雨
冬瓜や何はともあれ半分に

本多俊子

木の神も田の神もみて白露かな
しみじみと水に味ある生身魂
石庭の石るいるいと秋の声
水底に尺八をきく八月忌
奥淡海色なき風の吹きぬたり

近藤喜子

稲光わが横顔を削ぎにけり
鉦叩たましひ深きところまで
絶対の高さ銀河の濃くありぬ
一日の短かし蚯蚓鳴きにけり
間引菜の進行形のままなりし

瀬川公馨

炎天下錦絵くだんうしが淵
外連味たつぷり種はりゑんじゆかな
青栗のイガイガ鎧兜かな
ルーヴルの三頭六臂夜の秋
珊瑚草へ傾きわたる日宙なり

久保東海司

墓参り終へ帯解けば落つ扇子
梵鐘の音を容れたり山粧ふ
石筍や滴りの音連綿と
日盛りの浜辺に雑魚じやくのすだれ干し
湯上りの匂ふをんなや扇風機

中野京子

円光や籠いつぱいにトマト挽ぎ
蟬時雨大樹の力広げをり
一つづつ影もち歩く蟻の列
日々の砂曼荼羅や冷奴
ハンカチを振つて青空滲みけり

柳川 晋

貴婦人と一角獣と黒葡萄
初鷹を入らずの森に放ちける
黙釣^{はぜつり}人に入り交りたる山の民
先物の買ひに精出す生身魂
宇宙からは見えぬ鹿垣墳墓の地

近藤 芳子

鹿ヶ谷かばちやのくびれなぞりをり
産土の青田に続く青田かな
閑伽桶の籬のゆるみや苔の花
蟬鳴いて去りし真昼の静寂かな
不織布の枕カバーや明易し

岩下 芳子

立秋や一人の息を整へる
蟪蛄の斧もて祓ひ清めたる
まつすぐに歩いてゆけば夜の秋
宇宙まで蓮の実飛んでゆきにけり
文章の綴れぬ夜のつづれさせ



槐市集

犬塚芳子

網代笠鉄鉢の僧立ちつくす
過ぎし日より今が大事と冷奴
落ち蟬を手にしてこの世の事思ふ
蟻の列今日も続きて何思ふ
生涯をこつこつ生きて盆の月

犬塚李里子

夕河鹿壺中の天の閑けさよ
草を引く柵といふ強き根を
黄コスモス向きたい方を向いてをり
秋彼岸真白き石を拾ひけり
国男の忌河童居さうな溷暗し

井上静子

朝顔やゆつくり歩む乳母車
秋の蝶紅白帽を越えゆけり
秋茄子の味噌で仕上げし照りを盛る
墓石を大夕立の洗ひける
麦飯や皺の数ほどえびす顔

岩月優美子

儂さを知らず芙蓉の紅さかな
蘆原に佇ちて万葉人となる
秋茗荷父母の齢も疾うに過ぎ
流星の早さに旅の終りたる
過去形の夢崩れゆく秋の潮



槐集

高橋将夫選

打たせ湯の真珠ころがす日焼肌 枚方 熊川 暁子

夏季講習睡魔が英語しやべりをる

金魚より水の重さを掬ひけり

槍投げの炎帝を刺し跪く

形あるものに触れたく暮洗ふ

秋の蟬まなこ濡らして鳴きにけり 大阪 有松 洋子

秋麗いのち光りてけふを生く

さはやかに明日を生きんと今は泣く

大神も悪魔も好む桃を食ふ

月代やまぼろしを産む用意して

すててこの女一 献佛間かな 京都 竹中 一花

婆娑羅絵や六道参りの坂に入る

施餓鬼会の寺に薄闇流れ入る

射手座見ゆ厨にどんと夏大根

六人の笑ひ声もて蠅叩く

如とありし師の墨痕や夏祭り 枚方 谷岡 尚美

広島忌配達さるるこしひかり

賀茂茄子の素生正しき眉目かたち

京みやこに生れ京に死すひと大文字

準決勝躍動の夏終りけり

絶唱や空蟬の背裂けてをり 大阪 江島 照美

自在鉤漆黒となり夏炉焚く

墓といふ寂びゆく慣秋夕焼

思ひ出も日焼けの跡もくつきりと

括らるる首細かりし荒鶉かな

呉服屋の秋へ誘ふ色と風 寝屋川 山根 征子

大文字魂すでに天にあり

したり顔にくき男の秋日傘

妹と父母を語りつ墓洗ふ

夫よりも先寝する吾夕月夜

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

形あるものに触れたく墓洗ふ 熊川 暁子

ご先祖を思いながら墓を洗っている景。勿論かの世のご先祖は見ることも触れることもできない。それでも、なんとかして五感で感じてみたい作者。今、作者にとつて墓は精神世界と現実を繋ぐ唯一の存在なのだ。

〈打たせ湯の真珠ころがす日焼肌〉の「真珠ころがす」は湯を弾く日焼の肌の若々しさを端的に捉えている。

〈夏季講習睡魔が英語しやべりをる〉は夏季講習の眠さを巧みに表現している。講師が、まるでわけのわからぬ英語を話す睡魔に見えてくる。

〈金魚より水の重さを掬ひけり〉は金魚掬いに苦戦している様子をユーモラスに捉えている。「水の重さ」で紙は破れてしまったかもしれない。

〈槍投げの炎帝を刺し跪く〉は跪いた槍投げの人がロダンの彫刻のように見えてきて愉快。

さはやかに明日を生きんと今は泣く 有松 洋子

泣きたければ、我慢しないで泣いてしまえばよい。そして、明日からまた爽やかに生きたらいいのだ。〈秋麗いのち光りてけふを生く〉もまた命の賛歌。

〈秋の蟬まなこ濡らして鳴きにけり〉、蟬の目はつるつるで濡れているようだ。秋の蟬なら、なおさらそう見える。

〈大神も悪魔も好む桃を食ふ〉〈月代やまぼろしを産む用意して〉も俳諧。

六人の笑ひ声もて蠅叩く 竹中 一花

「六人の笑ひ声もて」で、たかが蠅一匹を叩くのに右往左往している光景が目につかなくておもしろい。

〈施餓鬼会の寺に薄闇流れ入る〉は施餓鬼会の寺の本質に迫っている。〈射手座見ゆ厨にどんと夏大根〉は射手座と夏大根の取り合わせがユニーク。

京に生れ京に死すひと大文字 谷岡 尚美

前書に悼とある。京に生れて京で他界された故人はきつと幸せな方だったのだろう。

〈賀茂茄子の素性正しき眉目かたち〉〈広島配達さるこしひかり〉はまことにおだやかな精神の風景。

思ひ出も日焼けの跡もくつきりと 江島 照美

日焼けの跡のようにくつきり残った思い出とは、どんな思い出だったのだろうか。一夏の思い出というが、振り返ってみると、私の場合はいくつきりとした日焼けにも、思い出にもずいぶん疎遠になったようだ。どちらかというところ、〈墓といふ寂びゆく慣秋夕焼〉の世界に近くなっているのかもしれない。

〈括らるる首細かりし荒鶉かな〉、荒鶉といえども首は細く、括られているが故に美しいのかもしれない。

呉服屋の秋へ誘ふ色と風 山根 征子

呉服屋に並ぶ着物はもうすっかり秋物に変わった。着物の色合いにも、吹く風にも秋を実感させられる今日この頃といったところ。(以下略)